

書評

瀬尾 攝 監修, 高田 勲・野見出一生 編

産業医活動マニュアル

信原 克哉 (信原病院院長)

産業医制度の法制化からはや十数年が過ぎ去ろうとしている。しかしこの間、ごく一部の人たちを除いて、ほとんどの医師たちはその制度への関心は薄く、急激に発展した産業経済によってもたらされた新しい疾病にただ臨床医として対応するだけであった。こうした傾向の中で、労働省、日本医師会、産業医学会など関係諸団体は当然のこととして社会的要請に応じて産業医の育成に努力してきたようである。しかし、資質の高い積極的な産業医は実際にはなかなか育成されず、それが実を結び始めたのは日本医師会が『認定産業医制度』を発足させた平成2年4月、一昨年のことである。

新しい労働衛生管理の展開と高齢化社会の中で、青壮年労働者の健康管理と健康増進は産業医の重要な課題となってきた。しかし、今後技術開発はさらに展開するであろうし、作業様態の変化、労働力の中高齢化、女性の職場進出、労働の国際化などに伴う諸変化によって職業性疾病も一層複雑なものになることが予想される。産業医活動の主眼であるポジティブヘルスケアも、時々刻々と変遷してゆく事態に素早く対応できるものでなければならないだろうし、そのような産業医が産業社会から要請されるだろう。

この時期、実にタイムリーに『産業医活動マニュアル』が医学書院から発刊されたことは喜びにたえない。殊に本書の内容は産業保健から始まり、その職務、衛生管理、行政法規、災害防止、救急処置、メンタルヘルスケア、健康管理保持と保持増進、作

業管理およびその実際、方法論などと広範多岐にわたっており、この1冊で現在の産業医の渴を癒すに十分なものである。分担執筆とはいえ監修者、編集者および筆者諸氏のご努力は大変なものであったであろう。参加された方々に心から敬意を払いたいと思う。

昭和62年10月、日本整形外科学会でも産業医委員会が設置された。整形外科医が産業医としてどのように専門知識を生かして社会に貢献できるかという構想のもとに発足したこの委員会は、学術集会でのパネルディスカッションの実践、頸肩腕症候群・腰痛症・振動障害など整形外科関連疾患の研究、さらに卒後産業医教育カリキュラムの検討などを行っている。本書を通読していると、発足時の委員会に瀬尾 攝氏(監修者)をお招きして長時間にわたって薫陶を受け、担当理事としての面目を施した楽しい記憶が昨日のように甦る。その後、委員会は出来るだけ関連講習会に出席して資格を取得、産業の高度化、複雑化による疾病に対応できる産業医グループの一員となるよう、当会会員に呼び掛けている。第三次産業の発展に伴う障害・疾病の器質的な問題はポジティブヘルスケアを含めて整形外科医の任務でもある。本書を座右の書として読破されることをお勧めしたい。そして専門性を生かした産業医として整形外科医が次回の改訂時に参加できることを心から願うものである。

(B5判 360頁 4,635円(税込) 1991年 医学書院 刊)